
幸せにならないと許さない

林檎の葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せにならないと許さない

【Nコード】

N6311E

【作者名】

林檎の葉

【あらすじ】

「もう限界。」番外編。コナンから始めて計画の話を聞いた哀の反応は——？

（前書き）

この小説はわたしの処女作の「もう限界。」の番外編です。読んでない人はそちらから読んでください。でないといけないわけがわかりません…。

ピピピピ ピピピピ ピピピピ...

わたしは目覚ましの音で目を覚ました。隣の博士のベッドはもぬけのからなので、どうやらすでに起きているらしい。博士は昨日眠れたのかしら？わたしは心配で眠れなかったわ。昨日は「例の計画」を実行した日だったから...

〈回想〉

「え？全部話すって...」

その言葉を聞いた瞬間、わたしは自分の耳を疑った。

「蘭に、全部話そうと思うんだ。」

わたしの耳が確かなら、彼はそう言ったはず。隣で博士も目を丸くしている。工藤君はこの日、わたしと博士に大事な話があるからと言って、博士の家に来ていた。

「ちょっと工藤くん、何言ってるの？前にも言っただけよ、彼女に

組織のことを話したら確実に彼女にも火の粉が飛んでくるって！」

「ああ、わかってる。」

わたしは、彼の何もかも見透かしたような視線に耐えきれなくて、つい大声で言い返した。

「わかってないわ、あなたは何もわかってない！彼女に全てを明かしたら、彼女は毎日組織の視線におびえて暮らすようになるかもしれないのよ！？あなた、好きな人を自分の手で危険にさらすつもりなの！？」

「あ、哀くん！」

隣で博士がオロオロしている。でも、今はそんなことがまっちゃんにられない。

「確かに、オレが今やろうとしていることはオレのエゴでしかない。蘭が全てを知ったら、危険な目にあう可能性が高まることも十分わかってる。」

「だったら…っ」

「オメーに蘭の何がわかるって言うんだ？」

その一言に、わたしと博士は固まった。今、なんて…。

「蘭が全てを知ってどうするかなんて、つき合いの浅いオメーにわかるわけねーだろ。蘭はそんなに弱い人間じゃない。ガキの頃から見てきたオレが一番わかってるよ。」

心の壁を、えぐり取られたような気がした。

「お、おい、新一くん！言いすぎじゃぞ！いつもの新一くんらしくないぞ？」

「あ、ああ…悪い…。」

「いったい急にどうしたんじゃ？今まで一言もそんなこと言わなかったじゃないか。」

彼らの一言ひとことが、わたしの耳には入っていなかった。

「オマエニランノ、ナニガワカルンダ？」

確かに、わたしは蘭さんのことを何も知らない。まともに会話したことだってないし、自己紹介するだけだってかなりの勇気が必要だったんだもの。しかも、そのきっかけをくれたのが彼女自身だっていうのが、少し悔しいけど。

「なんかオレの方が限界が近いみたいで、さ。」

彼の言葉で、急に我に返った。限界、か…。

「おいおい…。」

博士はいまだに目を白黒させている。わたしは勇気を振り絞って、その一言を口にした。

「あなたが全てを話したら…彼女は幸せになれる？」

「「え？」」

今度は彼が驚く番。ふふ、さっきの仕返しよ。

正直に言うところわたし、工藤君のことが好きだった。そして、今も好き。自分でも気づかないうちに、毒薬の研究対象としてだけじゃなく、1人の男の人として彼を見てみたいね。

もし万が一、彼がわたしを選んだとしても…きっと彼女ならこういうでしょうね。

「新一の幸せがわたしの幸せだから。」

わたしはそこまでお人よしでも、心が広いわけでもないけど、あなたには幸せになってほしいから。いえ、幸せにならないと許さないわ。

わたしはその時、彼が一言でも「わからない」とか、「たぶん」とか、そういう言葉を口にしたら、この計画には断固反対するつもりだった。そんなあいまいな気持ちで彼女に打ち明けても、彼女は幸せになれないと思ったから。でも、彼が口にした言葉は…

「ああ、もちろん。絶対に幸せにしてみせる。」

だった。ああ、そうだったわね。あなたはそういう人だったわね。あなたならピンチをチャンスに変えられるかもしれない。

「そう…それならいいの。」

わたしはそう言うと、キッチンへと向かった。その後ろを、博士が慌てて追いかけてくる。

「い、いいのか？」

「いいも何も…彼の意志は固いようだし、わたしたちがどうこう言ってもしょうがないわ。それに…蘭さんには幸せになってほしいのよ。」

「哀くん…。」

ふと見ると、博士は目を潤ませていた。

「ちよ、ちよつと博士、泣かないでよ。ほら、手伝つて。コーヒ入れるの。実行が決まったからには、いろいろ計画を練らなくちゃいけないでしょう?。」

「あ、ああ…。」

わたしは博士の返事を聞くと、キッチンに入ってしまった。

〈回想終了〉

あれからもう1週間も経ったのね…。上手くいったかしら? まあ、工藤くんのお母さんも協力しているようだから大丈夫だとは思っけ

ど……。今朝、会ったら早速カマをかけてみる必要があるわね。

わたしはそこまで考えると、服を着替えるために立ち上がった。

（後書き）

こんにちは、林檎の葉です。

この小説は、「もう限界。」の番外編小説です。哀ちゃんの視点での番外編を書いてほしい、という要望があつたので書きました。正直哀ちゃん視点での小説は難しいイメージがあつたんですが…どうでしょうか？

哀ちゃんが好きな方、すみません！>< この小説のコナン、哀ちゃんに対して酷すぎですね。ショックを受けられた方もいると思います。

でも、哀ちゃんが嫌いというわけではないですよ。実際性格が似ているところもあるんです。よくクールだって言われるし、動物好きなので。

でも、こんな展開もいいかな、と思いこうさせてもらいました。今回のコナンは限界に近くて気が滅入っていて、つい哀ちゃんに当たってしまった、ということに許してやってください…。

なんか最近、後書きというより言い訳のスペースになってますね…。すみません！

あと、前作の短編の後書きでよろつと書いたんですが、次回作は黒の組織も絡んできて全体的に重いです。なので、後書きだけはせめて軽く、コナンとの会話形式にして、文体も崩したいと思います
^^ 作者自身楽しみます♪

またあとがきが長つたらしくなりました…。ここまで読んでいただいてありがとうございます！
よかつたら評価お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6311e/>

幸せにならないと許さない

2010年12月14日20時31分発行